225

## 大坪（おおつぼ）遺跡

（出水市美原町１～４番地）

### 位置と環境

大坪遺跡は，矢筈岳の裾部から出水平野に広がる沖積地に立地している。八代海に注ぐ米ノ津川及び高柳川の右岸にあり，標高は約８ｍである。大坪遺跡は沖田岩戸遺跡と隣接し，見入来遺跡及び榎木田遺跡も同一地域内にあり，これらを総称して大坪遺跡として紹介する。当遺跡周辺の水田は昭和40年代に耕地整備が行われているが，耕地整備前の地籍図を見ると明確な条里型地割であったことが分かる。

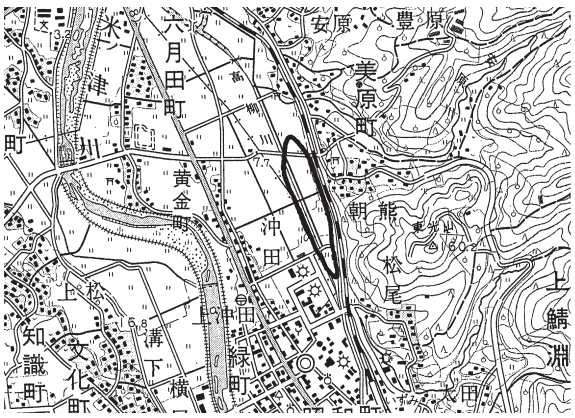
### 調査の経緯

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い県教育委員会が調査主体となり，確認調査を平成11年（1999年）１月～３月，本調査を平成11年（1999年）５月～平成13年（2001年）３月まで実施した。調査面積は，27,247㎡である。

### 遺構と遺物

〔縄文時代〕

大坪遺跡で出土した土器は，後期終末～晩期に位置付けられる上加世田式土器及び入佐式土器，それに黒川式土器であり，弥生時代開始直前へ至る様相が窺える。遺構としては，埋設土器37基，焼土塊の入った大型の凹地２か所，ドングリピット１基，土坑４基などがある。埋設土器は再生を祈った施設ではないかと考えられており，日常的なものから非日常的なものにするため底部に故意に孔が開けられている。古いタイプのものには浅鉢形土器が蓋として被せられていたが，新しいタイプになると木製の蓋に代わったのか土製の蓋はみられなかった。ただし，

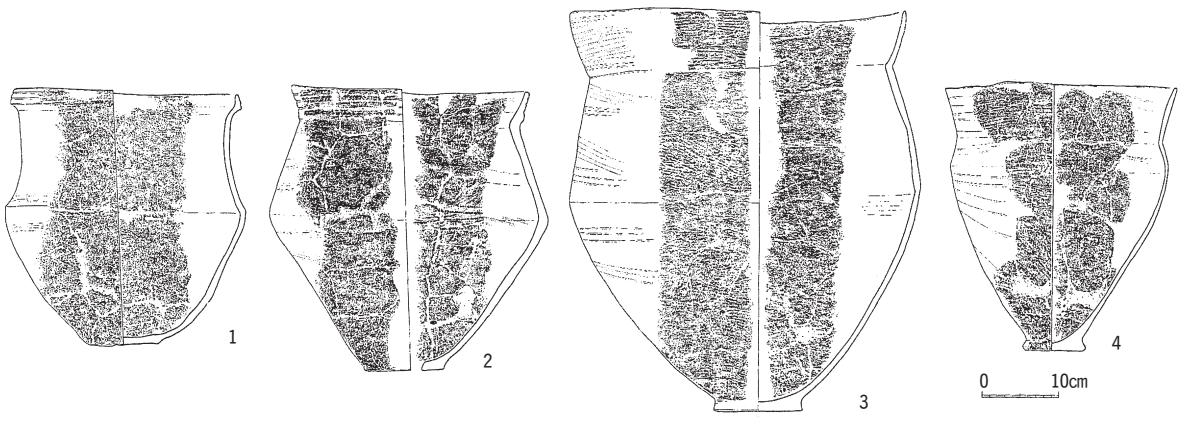



第１図　大坪遺跡の位置

１基だけは深鉢同士で上下を成している例がある。埋設土器が検出された場所では，その時期と同じ土器が出土していて，埋設土器と同じ空間で生活が行われていたと考えられる。大きく分けると，北側に上加世田式土器から入佐式土器古段階の遺物が多く，南側は入佐式土器新段階から黒川式土器が多く分布する。

出土遺物には，深鉢形土器，浅鉢形土器の他に石鏃，縦長剥片，磨製石斧，鑿状石器，石錐，石匙，石皿，磨石，小型の磨石，石錘，凹石，小型の凹石，石製土掘具，円盤形石器，異形石器，石刀，土製加工品，組織痕土器などがある。これらの遺物からは，遺跡周辺に広がる山間部及び海浜部の恵みを受けていたことが分かり，また耕作地も隣接していたのではないかと想定される。

大坪遺跡の縄文時代の特徴は，玉類の多さにある。上加世田式土器の分布域と入佐式土器の分布域とに分かれ，時期的な差がみられる。上加世田式土器に伴う玉類は透明感のある良質な石材を用い，薄手で




第２図　埋設土器（１上加世田式土器，２入佐式土器古段階，３入佐式土器新段階，４黒川式土器）

写真１　緑色の玉類

統一された感じにつくられているのに対し，入佐式土器に伴う玉類の石材は緑色が濃く大きさも形もバリエーションをもっている。これまで出土した玉類は，緑色の石材を利用したもので，完成品，製作途中のもの，原石及び剥片がみられる。完成品は，勾玉６点，管玉25点，丸玉５点，平玉３点，垂飾品１点である。製作途中のものは，穿孔途中のもの９点，研磨痕のみられるもの13点，擦り切り技法による痕跡のみられるもの６点があり，原石及び剥片は50数点出土している。玉砥石や擦り切り石器などの製作用具は出土していないものの，この場所で玉つくりが行われていたと考えられる。なお，この時代には水晶が穿孔用の錐として使用されたと言われるが，大坪遺跡でも十

第３図　条里型地割（昭和40年代）と発掘調査区域

写真２　波板状凹凸面

数点の水晶が出土している。鹿児島県内で縄文時代後期終末～晩期にかけての玉類の出土は，約20遺跡で知られているものの，製作用具が出土した遺跡は加世田市上加世田遺跡と金峰町諏訪前遺跡のみである。今後，各地域の同時期の玉類と比較しながら，原石の産地，製作技術と工程，完成した玉類の供給地が明らかになることを期待したい。

〔**奈良時代から平安時代前半**〕

14区から16区及び21区から25区にかけて，II層上面及びIIｂ層・III層に８世紀後半～９世紀前半の遺構や遺物がみられる。遺構には，竈を伴う１辺３ｍの竪穴住居跡１軒のほか，焼成土坑３基，溝状遺構などがある。鹿児島県内で竈を伴う竪穴住居跡は初例であったが，現在は金峰町や川内市でも検出されている。床面及び四面が焼けた方形の土坑が３基検出されている。土師器の焼成土坑とも考えられるが，検討を要する。この時期の溝状遺構は，幅250㎝，深さ70㎝で地形に沿って延びている。

遺物には，須恵器，土師器，甑，土錘，鉄製品，鞴の羽口，紡錘車，馬の歯などがある。刻書土器が３点あり，そのうち２点は同一の文字が書かれていると考えられる。また，須恵器蓋を転用した硯もあり，円面硯の可能性がある須恵器も出土している。須恵器には，荒尾産のものが数点含まれている。出土遺物の中で須恵器の割合が多いことや須恵器の特徴などから，奈良時代後半～平安時代前半頃の時期と考えられる。

〔**平安時代末から中世**〕

33区～38区にかけて検出された溝状遺構からは，玉縁の白磁，滑石製石鍋，黒色土師器，砥石などが出土している。輸入白磁の口縁部の断面が玉縁状になっていることと青磁がほとんど入っていないこと，滑石製石鍋に鍔がつかないなどの特徴がみられることから，11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。この時期と考えられる掘立柱建物跡も９棟検出されている他，波板状凹凸面や土坑などもある。この時期には，地形に沿った遺構配置と方位に合った遺構配置の二者がみられる。

掘り込まれた層位の違いや出土遺物の内容から，地形に沿った遺構の方が方位に合った遺構よりも古いということが明らかとなった。南北方向に合った遺構は，昭和40年代以前の区画に重なることから，条里型地割の一部であると考えられる。したがって，この地で条里型地割が施行されたのは，少なくとも12世紀以降であったことが分かる。

**特徴**

縄文時代後期末～晩期前半にかけて埋設土器が37基検出され，鹿児島県内では最も多い。同時期の玉類も多く，未製品もあることからこの地で製作されていたことが明らかとなった。古代の土師器焼成土坑と考えられる遺構が検出されたのは，鹿児島県内で初めてである。また，条理型地割が南九州でも鎌倉時代には実施されていたことが，発掘調査によっても明らかとなった。

**資料の所在**

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

**参考文献**

鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「大坪遺跡ほか」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』79

（東　和幸）